

心理臨床の場におけるリズムの生起に関する試論

— プレイセラピーでのリズムカルなやりとりを手がかりに —

中野 江梨子

I はじめに

本論文は、プレイセラピーの過程でクライアントとセラピストの間で交わされた、言葉を用いたリズムカルなやりとりのエピソードをとりあげ、このリズムカルなやりとりが生じたときに、その場で何が起こっていたのか検討することを目的とする。そこで本稿では、まずリズムが心理臨床の理論においていかに論じられてきたか整理し、リズムは人のこころにいかなる作用を及ぼすのか、人はリズムを通じてどのような経験にいたるのかという点から先行研究をたどる。続けて、心理臨床面接のやりとりの中でリズムが際立った印象をもたらした事例のエピソードを紹介し、最後に、これら知見をもとに事例のエピソードの考察を行なうこととする。

II リズムと人のこころの関わり

心理臨床の語りや表現には、語られる言葉の抑揚や身振り、息遣いといった、さまざまなリズムが付随する。リズムという言葉はそもそも、形や姿を意味する *rhythmos* という言葉にその起源をもっているが(徳丸, 2007)、その言葉が普及するにつれて、時間的な強度や動き、速度といったものを広く意味するようになった(徳丸, 2007)。今日では、音楽のリズムやサーカディアン・リズムも含めて、リズムは広く機械的なものから生命的なもの、音楽的なものに通じうるものだとされている(中村, 1999)。例えば西洋音楽を構成する三要素のうちメロディーやハーモニーを知らない人はいてもリズムを知らない人がいないように、リズムとは原初的なものであり、その原初性は生命力とつながりうる(中村, 1999)。人は聴覚を通じて知覚した刺激を構造化することでリズムとして認識し(後藤, 2000)、さらに体内での共振に基づく筋肉感覚によって補完する(Jaques-Dalcroze, 1965/2003)。以上から、心理臨床の場において、人がリズムを感じるのは、たんに受動的な行為としてではなく、心身全体を通じて他者の表現を感受し、こころの営みのもとで体制化した結果であることが示唆される。ここでリズムに着目することの心理臨床的意義を論じるにあたり、まずはリズムとこころとの関わり、加えて心理臨床面接におけるリズムの作用について整理することにした。

人のこころの動きのダイナミクスをリズムと結びつける試みが、Freud (1923/1996) の自我・超自我・エスからなる心的構造モデルに基づく自我心理学の立場で行なわれてきた。Kris (1940) は、エスに由来する心的エネルギーの力動をリズムという概念を導入して以下のように論じた。まず、エスを統制する自我の働きが何らかの要因で弱められそのコントロールが緩まると、そ

れまで無意識下にあった情動や要求などあらゆるものが異なるリズムを伴ってエスから浮上してくる。心的エネルギーが増加する結果として緊張状態に陥るが、動作などのリズムカルな動きを行うことで心的エネルギーを放出すると、緊張から解き放たれ、人は快を感じるようになる。さらに、Greenacre (1954) は人のところに作用するリズムを、リズムがもたらす快の質に基づき2種類に区別した。一つは、心臓の拍動や呼吸といった、日常から慣れ親しみ、繰り返されることで安心感や鎮静化をもたらし、均一で持続的 sustaining な性質をもつリズムである。もう一つは、興奮の高まりによるクライマックスがあり、それによって急激な緊張の放出へいたる、駆り立てる propulsive といった性質を備えるリズムである。こうしたところを沈静化するリズムと駆り立てるリズムは、リズムカルな動きを伴う多くの活動に、さまざまな割合で含まれている (Greenacre, 1954)。したがって、リズムは心的エネルギーの高まりと放出に関わりがあり、その緊張のリズムカルな放出に伴って、人は興奮と沈静や安心感が複雑に織り交ざった多種多様な快を体験することが仮定される。

リズムは語られる言葉や身体的表現の意味内容とは区別される構造的形式的要素の一つであるが、心理臨床の実践において、リズムを含む非言語的要素へ着目することの重要性は、これまで多くの臨床家によって指摘されてきた。たとえば、Sullivan (1954/1986) は、リズムなどの語りの音声的側面の変化に着目し、精神医学的面接を、言語的なコミュニケーションの場ではなく、すぐれて音声的なコミュニケーションの場だと定義して、非言語的要素を手がかりに面接を行った。神田橋 (1990) は対話精神療法において“語られるコトバ”の前言語的要素が、意味内容とは異なる情動状態や生体機能を伝える、言語的要素とは異なる情報を提示すると考えた。La Barre (2005) は、語りだけでなく表情や動作といった分析場面に埋め込まれた動的な側面を構成する要素の一つとしてのリズムに着目して分析面接をすすめ、言葉の次元だけでは知ることの困難な情動や対象関係、転移・逆転移を理解する手がかりとなることを示した。すなわち、リズムを含む非言語的要素は、言葉によって表現される以前に、また言葉の意味内容以上のものを多層的に包含しており、こうした側面に注意を払うことが心理臨床の実際場面において有用であるということが示唆される。

ここまで、人のところにおけるリズムの作用、および心理臨床場面におけるリズムの内包する意味について概説し、その重要性を確認した。そこで次章では、本論の目的である心理臨床場面でのやりとりについて検討するために、人がリズムを媒体にして行う最初のやりとりである早期母子関係におけるリズムの働きについて整理する。

Ⅲ リズムのやりとりにおける作用

人がリズムと近い関わりをもつのは、生後間もない頃である。母親が乳児を胸に抱いてリズムカルな詩を読み聞かせる際、ちょうどリズムと、母親の血液と、子どもの血液の流れが一体化する (小泉, 2001)。0歳半ばかりの乳児との遊びでよく使われる子守唄やあやし歌、手遊びは、言語や文化が異なっても、類似したリズムや音韻、メロディーをもち (Trevarthen et al, 1998/2005)、全ての乳児が生まれながらにリズムを経験することができ、リズムを通じて安心感やなぐさめ、たのしみを感じとる。Trevarthen ら (1998/2005) によると、乳児は、

他者の声や言葉に伴うリズムを一つの手がかりとして、他者の心理状態を正確に弁別し、他者からの話しかけや働きかけにリズムを同調させることで応える。それだけではなく、乳児は、自分に対する他者からの話しかけや働きかけにリズムを同調させることで応えることが可能である (Trevarthen et al, 1998/2005)。

Stern (1985/1989) は乳児と他者との間の原初的で特異的な情緒交流を“情動調律”と命名し、その媒体になるものの一つとしてリズムをあげ、以下のように説明した。情動調律とは、無意図的に生じ、他者の感情状態に共鳴して、この共有された情動状態がいかなる性質のものかを他者に対して表現する行動である。そこでリズムは、言葉 (幼児の場合は前言語ではあるが) や行動に伴って生じる情動の強度や構造を他者に伝えること、さらに、伝えられた情動の強度や構造をそのままに、代替可能な言葉や行動に変換して伝え返すことを可能とする。これがうまくいくと、個別の存在として対する二人の人間の間で、感情状態の共鳴・共振を指す“間主観的合体” (Stern, 1985/1989) にいたる。このように、情動調律を通じて“共にある” (Stern, 1985/1989) という体験をすることは、乳児が内的感情状態を、他者と共有し得る体験であることを認識するのに重要な役割を果たす。情動調律には、乳児の遊びに入っていく、乳児が遊び続けるのを励ます作用がある。逆に調律が失敗すると、乳児の遊びは中断し、表情などで違和感を示す。調律されたことのない感情状態は、対人間で共有可能な体験の脈絡からは切り離される傾向をもつ。この程度が過度に強まると、間主観的なレベルでの慢性的な隔離を体験することになる。

以上のように Stern (1985/1989) は述べているが、リズムを介する情緒レベルでの共鳴といった原初的なコミュニケーションは、早期母子関係においてのみ見られるわけではない。たとえば、言語的な関わりの困難な自閉症児や重度心身障害児に対して、子どもたちの発声や身体の動きで自然と表現されているリズムを治療者が感じとり、それに同調するリズムで返すことによって関係を築き情緒レベルでの交流が可能となるといった、リズムのもつ原初的なコミュニケーション機能は、音楽療法の治療実践でも活かされている (Trevarthen et al, 1998/2005 ; 西巻, 2004 など)。さらに、言語を通じた心理臨床の実践が可能な成人においてもまた、言語的交流とともに情動調律は重要な治療機序になるといわれている (Stern, 1985/1989)。リズムには、波長の異なる振動が互いに作用し合い、共振するという引き込み作用があり、リズムを喚起するコミュニケーションにおいて、身体的にも精神的にもリズムが活性化され、人はリズムの上で共振できる状態になる (中村, 1999)。すなわち、リズムは年齢を問わず、あらゆる人と人とのやりとりの間で、それぞれを引き合い、一体化させる働きを有している (中村, 1999)。

しかし、やりとりの次元におけるリズムは、人を引き込み共鳴させるという性質をもつがゆえに、危険性をも備えている。神田橋 (1990) は、リズムを含むプレ・バーバルな要素による抱えの機能は、しばしば意図的に深くしようと試みると揺さぶりの機能を発揮するが、その揺さぶりの強度を加減することがほとんど不可能であるために、常識的な範囲にとどめるべきであると述べている。情動調律が乳児と養育者の間で自然に生じるものである (Stern, 1985/1989) ことから、リズムがやりとりの中で自然に生起し、知らぬ間に共振し合っているからこそ、心理臨床の面接過程においても、リズムが治療的な意味を有するということが示

唆される。同時に、リズムが心身全体を通じて経験され、心身の奥深くに作用することから (Jaques-Dalcroze, 1965/2003)、不適當なリズムによる介入は、侵襲体験となる可能性があるのである。

以上、リズムが心理臨床のやりとりにおいていかなる作用や危険性をもつのかに関して論じてきた。リズムは、言語を介さずとも、人と人を情動の次元において呼応させ、“間主観的合体”状態をつくりあげる (Stern, 1985/1989)。これは同時に、リズムが“揺さぶりの機能” (神田橋, 1990) をもつことを意味している。こうしたリズムの性質を踏まえ、次章では、本稿で扱うリズムミカルなやりとりが印象的なプレイセラピーのエピソードを提示する。

IV 事例の提示

以下は、小学校中学年の男児 A と筆者との間で行なわれたプレイセラピーでのエピソードである。当時、A は、周囲の生活環境が不安定で落ち着かない中、それに対する不安や動揺を1人で抱え、耐え続けていた。なお、「」は A の言葉、〈〉はセラピスト (筆者) の言葉とする。なお、X 回と X + 1 回の面接エピソードのうちの斜体部分が、その前後のやりとりとは異なる、速くてリズムミカルなやりとりを示している。

X 回の面接以前の 10 数回の面接で、A は、セラピストに当たるのも構わずに、猛烈な勢いで野球ボールをセラピストに向かって投げたり、サッカーボールを蹴ることが続いた。ボールは部屋中の壁や戸棚にあたり、目まぐるしい速さであちこち飛び交った。セラピストはボールのとびかう異様な速さにやや違和感を覚えるが、A は「速くやらないと」と速度を緩めることは決してなかった。こうした遊びの中で、A は自らも縦横無尽に部屋を移動し、棚をよじ登って扉を開いて粘土を見つけた (X - 14 回)。「やわらかーい」とその質感を味わい、嬉々として粘土を捏ね、セラピストも同じように粘土を捏ねた。A は「今度は合体だ」と言うと、自分とセラピストの粘土をくっつけて捏ね始めた。途中で「先生も手伝って」と言い、合体させた粘土を同時に 2 人で一緒に捏ね続けることになった。X - 12 回では、ドミノを自分とセラピストが両側から中央で合流するように作ることを A が提案し、実際に中央でドミノがくっつくと「キース！」と躁的で異様なテンションで喜んだ。X - 14 回での粘土の「合体」や、X - 12 回での「キース！」といったドミノの接触にみられるセラピストへの接近と、こうした遊びの直後に続いてみられる、セラピストを刀で執拗に切りつける徹底的な攻撃が、面接過程の中で繰り返された。セラピストを徹底的に切りつけて殺そうとする攻撃の中にも、「相打ちだ」と言ってセラピストに抱きつく形で A がセラピストの腹部を切りつけるなど、セラピストの殺害に含まれる A の複雑な思いが感じられた。セラピストへの合体を求める遊びと、セラピストを徹底的に殺す遊びを行ない続けることは、セラピストだけでなく、A もまた、どうしたらよいのかわからないと感じている様子で、面接時間終了まで面接室の中で遊ぶことに耐え切れず、「終ろう」と呟くこともあった。

X - 10 回、最初は 2 人で、途中から A が 1 人で砂場に大きな穴を掘った。ある程度の深さになると、抱っこできるサイズの赤ちゃん人形の頭を A は乱暴につかんで穴の中に放り投げ、

1人でその人形を埋めた。赤ちゃんが死ぬんだ、とセラピストは感じたが、同時に、この赤ちゃんを埋める作業は丁寧な埋葬というより、乱暴に無造作に埋めているという印象を抱いた。Aはその後トランポリンを飛びながら、突然「いくで」と言うと、前に立ってAを見守っていたセラピストに抱っこ形でしがみついた。この遊びには、母性を希求するという思いだけではない、少し性的な感じが伴ったため、セラピストはやや違和感を覚えた。〈赤ちゃんは埋めた〉とAに言うと、Aは再びトランポリンを飛んで、「いくで」とセラピストに再び抱きつこうとした。セラピストはAを抱きかかえる形で着地できるような補助し、Aは地面に着地した。このようなセラピストへの強引にも感じられた接近と、その後続くセラピストへの猛烈な攻撃はその後の面接でも続き、次第にセラピストはどう対応したらよいのかわからない苦しみをを感じるようになった。こうした苦しみを覚える回がしばらく続いた後、Aはセラピストの時間をとめて、セラピストだけを動けなくした状態で背後から攻撃を続ける最中に、セラピストのお尻を剣で軽くついた（X - 5回）。Aが再び時間を動かしたことでセラピストが動けるようになり、セラピストがAの攻撃に応じると、「これ、やめよう」といって戦いをやめ、サッカーをすることになった。サッカーの途中で、思い出したように「かんちょうしてごめんな」と、Aは何度もしきりに言った。〈かんちょうされても、先生は死なないし、怒ってない〉と言うと、Aは神妙な顔になってセラピストの言葉をじっと聞いた。その直後にAの腹痛と高熱によるキャンセルがあり、その後の面接では、Aが中学生になり、セラピストが子どもになって遊び（X - 4回）、再びAは赤ちゃん人形を穴の中に埋めた（X - 3回）。X - 2回、セラピストはAの体型が男の子らしくなったように感じた。Aは力強い様子で、部屋中の玩具の上を、絶妙なバランスを保ちながら機敏に移動した。最後に足場の悪い玩具籠の上を歩こうとするも、籠が横に倒れてしまった。〈支えるから、大丈夫〉とセラピストがAを補助しながら発したのとほぼ同時に、「支えといてな」とAはセラピストに言った。Aは筋肉を震わせながら、バランスを保って玩具籠の上を歩き回り、スターと地点であったジャングルジムにゴールした。

この回の後にプレイセラピーを行なっている機関の休室期間があった。その間Aの周囲の環境はさらに不安定なものとなった。Aは自分の現状や今後強い不安や動揺を感じざるを得ない状況においやられていた。

X回のプレイセラピーの一場面：いつも施錠して面接を行なっているのだが、入室直後に「何で鍵をしめるの？」とセラピストに尋ねる。Aはセラピストに玩具を持ってくるよう甘えたり、ゆるやかなペースでサッカーボールをセラピストに向かって蹴る。セラピストは、Aが遊びに没頭しないように自分を制御しているような印象を抱く。この制御がなぜか不自然な感じを抱かせ、セラピストはぼんやりと不安を覚える。Aもまた、あまり元気がないようで、同じような不安を抱いているような感じがする。サッカーの途中、Aは一瞬セラピストの方を見てにやりと笑った後、突然扉をあげ、外をのぞく。「外で遊ぼうー」〈ここで遊ぶ〉「ほら、息」といって、スーハーとわざとらしく大きな深呼吸をする。セラピストはこの時、一緒に同じ部屋にすることが耐えがたく、ぐっと煮えつまるような空気をAは感じているのかもしれない、呼吸ができないように感じているのかもしれないと思う。この後、2人で黄色のフリスビーをとても速いペースで何度も投げ合う。何らかの緊張が高まるって来るような空気をセラピスト

は感じる。セラピストがフリスビーを保持している時、Aはセラピストの時間を止めて、セラピストに目を閉じるよう求める。セラピストだけが動けず、何も見えない。その間、Aはそっとセラピストに近寄り、フリスビーを持ち去り、どこかに隠す。さらにセラピストのズボンのポケットに何かを入れてから、目を開けていいと言う。セラピストは一体何がズボンのポケットに入れられたのかわからず、不安な思いと不思議な気持ちをとともに感じながら〈何やろう?〉と呟くと、突然、勢いのある言葉をAが発する。「あ、それ、ねずみやで」〈えー!?!〉「それ、ムカデやで」〈えー!?!〉。この時セラピストは、何かが急激に増幅する感覚と、Aにぐっと強引に、急速にひきつけられるような強い動揺、そして何が起きているのかわからないといった困惑を感じる。「うそー」といつもの楽しげな口調に戻ると、Aはセラピストのズボンのポケットからボールを取り出し、セラピストに見せる。その後、それまで遊びに使っていたグローブやフリスビーを、セラピストが目を閉じている間にAが次々隠していく。隠し終わってから、まずセラピストがそれらを探し、面接終了時間が近づくと、クライアントも一緒になって探し出す。

X + 1回のプレイセラピーの一場面： Aとセラピストでフリスビーをキャッチしたそばから、相手に向かって投げ返していく投げ合いを続ける。セラピストはフリスビーを投げている最中に、ふと、このフリスビーがすごく神聖なもののように感じる。しばらく続けた後、野球ボールを投げ合う。Aがセラピストに向かって投げている時、突然、急ピッチなスピードで、「あ、先生のポケットに、なめくじ入ってる」〈えー!?!〉「あ、先生のポケットにねずみが入ってる」〈えー!?!〉「あ、先生のお腹に脳みそ入ってる」〈脳みそ?大変やん〉。その後、Aの提案で「見つけゲーム」をする。セラピストは閉眼しながら、Aが玩具を隠しているのを待つ。その間、とても長い時間Aを待っているようにセラピストは感じる。Aは大きな砂山を作り、中にサッカーボールを隠している。「さあ、どこにいったでしょう」〈うーん〉。この時、ふと初めて一緒に遊んだ時にも砂山を作ったことをセラピストは思い出す。それをAに伝えると、次は「僕が隠れます」と言い、セラピストはどきりとする。Aはいろいろな場所に隠れ、Aを探すセラピストを、隠れた所からじっと見る。セラピストは必ず見つけないと、と感じ、必死で探す。数回繰り返した後、Aを見つけた喜びでほっとしたセラピストがAの対面にしゃがみこむと、Aはとても嬉しそうに、そしてやや幼さが漂う笑顔でセラピストをまっすぐ見つめ、突然リズムカルに、「あ、先生の鼻になめくじ」〈なめくじ?〉「あ、だんごむし」〈もぞもぞするからいやだー〉「あ、あり」〈ごそごそかゆくなるからいやー〉「あ、だんごむし」〈もぞもぞするよー〉ぱっと口調が変わり、Aは穏やかでかわいらしい調子で「だんごむし嫌い?」〈もぞもぞするからな〉「でも、手に乗せたらこちょこちょして気持ちいいよ」〈そう言われたら、いいかもしれへん〉「だんごむしはな、生まれた殻を食べるんやで」と言う。再度、かくれんぼをし、セラピストがAを探すのを、何度も繰り返し行う。セラピストは、このかくれんぼをとても深い次元での再会の喜びを共有しあっているように感じる。最後に野球をする。Aはレベル1から順にレベルをあげて投球する。セラピストも絶対にはずせないと感じ、真剣勝負でそれを打っていく。

この回の後、Aとセラピストの間で、こうしたかけあいのようなやりとりを交わすことはなかった。X + 2回でAは、セラピストが必ず自分を見つけられるよう「ヒント」になるものを出しながら、かくれんぼを行なった。さらにそれに続く回では、速いスピードでボールやフリスビーをセラピストに投げってくる際に、「今のはこうなった」とボールのコースをセラピストに説明する（例えばX + 3回）など、速いスピードでセラピストにボールを投げってくる時でも、その投球に力をこめて投球しながらも、同時にそのエネルギーを、自然な形で、適度に制御しながら投球を続けるといった遊びが行なわれるようになった。また、自分の周りの男性や、同年代の男友達に関して話すようになった（X + 4回）。Aがセラピストに身体接触を求めることはなくなり、2人で同じ部屋で一緒に遊ぶことが苦しくなるような空気に面接空間が覆われることもなくなった。

ここで斜体部分のリズミカルなやりとりについて言及すると、その直前まで行っていたボールやフリスビーのやりとりの速度とは異なる速さとインパクトをもっていた。その速さは、例えばかけあい漫才における急ピッチな盛り上がりのように勢いに満ちたものとして、セラピストである筆者の記憶に深く刻み込まれた。このやりとりは、唐突に発せられたAの言葉の速度に筆者が意図せずして応答し、その筆者の応答にAが反応する、というくり返しの中で、他とは異なる勢いをもったリズミカルなものになった。このやりとりの中で、Aの発する言葉は、『ぐっ』という言葉でしか表現しようのない感覚とともに筆者に体験された。

V 考 察

本稿ではクライアントが表現した言葉の側面と、言葉に伴うリズムの側面から、事例のエピソードを考察する。なお、考察の観点をこのように区別する理由は、言葉の言語的意味内容の側面とは異なる音声的側面に着目し、音声的側面から治療の大きな手がかりを得たSullivan (1954/1986) や、語られたコトバには、情動状態などの現在の状態を伝えるプレ・バーバルな要素と、イメージ伝達に使う言語内容の二つがあると述べる神田橋 (1990) らが示すように、言葉の意味内容と非言語的側面はそれぞれ異なる関係・やりとりの側面が表現されるためである。

(1) 言葉の意味内容の側面から

このエピソードの中で考察の主題となるのは、プレイセラピーX回目の「あ、それ、ねずみやで」〈えー！？〉「それ、ムカデやで」〈えー！？〉というやりとりと、これに続く「うそー」という言葉、そしてX + 1回目の「あ、先生のポケットに、なめくじ入ってる」〈えー！？〉「あ、先生のポケットにねずみが入ってる」〈えー！？〉「あ、先生のお腹に脳みそ入ってる」というやりとり、および「あ、先生の鼻になめくじ」〈なめくじ？〉「あ、だんごむし」〈もぞもぞするからいやだー〉「あ、あり」〈ごそごそかゆくなるからいやー〉「あ、だんごむし」〈もぞもぞするよー〉「だんごむし嫌い？」〈もぞもぞするからな〉「でも、手に乗せたらちょちょよして気持ちいいよ」〈そう言われたら、いいかもしれへん〉「だんごむしはな、生まれた殻を食べ

るんやで」というやりとりである。斜体部分のやりとりは斜体部分前後のやりとり（言語に限定せず、遊びを媒介としたクライアントとセラピストの間で交わされたやりとりを含む）とは異なる、速さと強さを伴うリズムカルで急ピッチなやりとりであるという点で非常に特徴的であった。

まず、斜体部分でクライアントが発した言葉には、ねずみやムカデ、なめくじ、だんごむし、ありといった生き物が含まれていた。これら生き物は、小さく、人の目に触れにくい日陰や地中といった場に生息し、あまり人から好かれない生き物であることが共通している。あまり好かれない生き物というのは、特に大人にとって好まれがたいという意味を有している。これら生き物は、人あるいは人の生活に直接的・間接的に害を与えるものとして駆除の対象となりうるものである。しかし子どもにとっては、単純に嫌悪する対象ではなく、それらを眺めたり、ときにそれらを使って遊んだり、どこか親しみを感じさせる生き物でもある。この言葉を発したクライアントは、不安定な環境であることに起因する心もとなさや居場所のなさを感じる今の自分を、人の生活環境下で共存することが認められがたく、また好かれがたい小動物に重ね合わせていた可能性がある。この重ね合わせは、自分との近しさゆえに感じる親しみと同時に、周囲にとっては受け入れられるためには自身から切り離さないといけない、クライアントにとって不都合なものでもあるだろう。

このために、これら生き物は、クライアントから切り離され、セラピストのズボンのポケットの中、あるいは鼻の上にその在り処が託される。さらにこのやりとりでは、言葉をセラピストに向かって発することで、自身の言葉をセラピストがいかにかに受けとるかにクライアントは注意を払っている。この点で、セラピストに向けられた言葉は、他者から否定されがちな側面をセラピストがいかにかに受けとめるのかという、クライアントの自己存在をかけた問いということもできるだろう。しかし、セラピストはクライアントの発した言葉に驚きや動揺を示してしまう。これを反映するかのようになり、X回では、クライアントがやりとりの最後に「うそー」と言ってやりとりを終了させている。この「うそー」という言葉を発することで、クライアントは嘘という現実とは異なる虚構をつくり上げ、その中にこのやりとりをおさめて、やりとりがクライアントに与える危機を自ら回避しようとしたのではないかと考えられる。

この斜体部分のやりとりは、小動物が現れるという点では共通するものの、言葉による表現は少しずつ変化している。X回目では「うそー」という言葉によって言語によるやりとりが終了したが、X+1回目では、嘘とは言われなくなり、さらにセラピストのポケットから鼻の上へと生き物の位置が変化した。セラピストの応答も、最初の〈えー〉といった当惑や驚きを表す感嘆詞に分類される言葉から、〈ごそごそかゆくなるからいやだー〉というように拒絶や困惑を表す感情を示した文を構成する言葉によって表現されるようになった。そして、小動物とセラピストの急な接近と、セラピストの困惑や拒絶が表明されたとき、クライアントはそれまでのたたみかけるようなやりとりを止め、「だんごむし嫌い?」「でも、手に乗せたらこちょこちょして気持ちいいよ」「だんごむしはな、生まれた殻を食べるんやで」という言葉を、ゆったりとした口調で発したのであった。

ここでは嘘という虚構の設定が少しずつ曖昧になり、最終的には、小動物に対するセラピストの思いをクライアントが直接問うという面接過程の変化がみられる。セラピストが小動物に

対してネガティブな思いを語ると、クライアントは小動物のうちの一つであるだんごむしの魅力を伝える。そしてセラピストがその魅力に応じて態度や言葉が受容的になると、だんごむしが自身を包み込んでいた卵の殻を食べて生まれ出てくるという、新たな生命の誕生のイメージをクライアントが言葉にする。また、それぞれのリズムカルなやりとりの後には、クライアントがそれまでセラピストと一緒に遊びにつかっていたおもちゃを隠したり、自分自身が隠れるかくれんぼを行なっている。クライアントは、自分の隠したおもちゃや自分自身を、セラピストに見出されることを求めている。隠したおもちゃやクライアント自身がセラピストに見出されることは、伊藤（1984）が述べた自己発見遊びの一種として、他者との関係において新たな自己が誕生することを意味していた可能性が考えられる。

以上から、面接の回を重ね、リズムカルなやりとりをくり返し経験する中で、誕生のイメージが展開していったことが示唆される。しかし、リズムカルなやりとりに注意深く検討すると、このやりとり自体が治療的に働いたために、クライアントの発したイメージが自律的に展開していったということは難しいことに気づく。より厳密にいうならば、クライアントの言葉に対して、セラピストは当惑や拒否で応じており、セラピストの応答がイメージの自然な動きや展開を守り促進する（河合, 1991）といった心理臨床の基本的な態度をとっていたために、イメージの自律的な展開が生じた、とはいいがたいのである。くわえて、心理臨床の面接では、クライアントの受け入れがたい側面を、クライアントに受け入れやすい形に変換して返すといった治療的応答の意義が唱えられている（松木, 2010）が、こうした応答をセラピストがしているとも考えることも難しい。セラピストの発した言葉の意味内容からは、クライアントのイメージの流れについていっていたとは到底いうことができないであろう。それでは、こうした事例の展開は何によって促されたのか。この問題意識に基づき、やりとりのリズムの側面に着目してさらに考察を進める。

(2) 言葉に伴うリズムの側面から

エピソードにおける斜体部分のやりとりは、「あ、先生のポケットに、なめくじ入ってる」という言葉を、クライアントがそれまでとは異なる速さで発したことに起因する。だが、それがたたみかけるような勢いを備えるリズムカルなやりとりになったのは、クライアントとセラピストの相互作用によっているといえることができる。なぜなら、クライアントが発する言葉の勢いにセラピストが応じられていたことや、これを証明するようにクライアントがやりとりを中断せずに続けたこと、この結果がリズムカルな言葉のかけあいになったといえるためである。

まず、このリズムカルなやりとりの契機となったクライアントの言葉が、いかなる内的状態から発せられたのかについて考察する。クライアントはやりとりにおける言葉を、急ピッチでぐっとセラピストをひきよせるような勢いや強度を持って発した。リズムは言葉の発し手の内的状態の力動的变化を媒体し、それによって他者の内的状態は共有可能である（Stern, 1985/1989）。そこで、セラピストの内的感覚を手がかりに、クライアントの内部で生じた力動的变化の様相を検討する。セラピストはクライアントの言葉を、ぐっという衝撃ともいえる体感とともに受けとった。この体感は、セラピストの内部に侵襲という形で入り込んでくるほどの強さをもつエネルギーとして感じられていた。この点から、クライアント自身もまた、自身

の内部に突然つき上げるように生じた、内的な力動的変化を体験していたのではないかと考えることが可能である。このことは、こころの内奥からエネルギーが突き上げてくるときにリズムを伴うという Kris (1940) の指摘からも示唆される。くわえて、クライアントとセラピストとの間で X 回の面接以前に繰り返されていた面接過程と X 回の面接がなされた際の外的状況、つまり、セラピストとの合体を希求する遊びを行い、その直後にセラピストを殺して距離を置こうとする遊びを繰り返し、自分なりにその願望をおさめようと試みたという面接経過、および、休室期間の間にクライアントの周囲の状況が悪化し、クライアントはさらなる苦境に立たされていたという点を考慮すると、ここでクライアントの中で活性化した心的エネルギーとは、これまでの面接過程の中で遊びに没頭するとまず活性化されていた、セラピストとの原初的の母子関係に類する接近・合体を希求するエネルギーと近似するもの、あるいはその再燃であった可能性が考えられる。

次に、クライアントとセラピストによるやりとり付随したリズムが、このやりとりで果たした働きについて検討する。やりとりに伴うリズムにセラピストは無意図的に反応し、クライアントに同じリズムの強度をもって返すことで、言語の意味内容の次元ではクライアントとセラピストの間にずれがあったものの、やりとりは維持され続けた。ここで自然と焦点がおかれていたのは、その動きの強度・時間的構造であり、こうしたリズムの次元でやりとりの過程をみると、クライアントとセラピストの間に早期の母子間でみられる情動調律が成立していた、ということができるであろう。情動調律が行なわれることで、遊びは守られる (Stern, 1985/1989) ことから、このやりとりが遊びとして維持されたのは、やりとりの基底をなしたリズムが共有されていたからであると考えられる。さらに、情動調律が成立していたということは、個別の人間として対するクライアントとセラピストが、リズムを介した調律によって、クライアントの主観的体験の次元においては“共にある” (Stern, 1985/1989) 状態、あるいは“間主観的合体” (Stern, 1985/1989) 状態をつくりあげることができていたということの意味している。すなわち、クライアントが X 回以前の面接過程の中で希求していたものの、言語やその意味内容の次元では遊びとして双方が共有することが困難であった原初的な合体状態が、リズムカルなやりとりを通じて実現されたと考えることができる。

さらにリズムを伴うやりとりの直前になされていたボールやフリスビーの投げあいとの対比から、このやりとりで生起していた現象について検討する。直前になされていた遊びでは、クライアントの投げる速度にセラピストは合わせて、お互いに目まぐるしい速度の中でボールやフリスビーを投げあっていた。その遊びの流れを引き継ぐようにして、クライアントとセラピストの間でリズムカルなやりとりが交わされた。ボールやフリスビーの投げ合いと、それに続くリズムカルな言語によるやりとりの間でみられる違いとして、クライアントの遊びの勢いに対してセラピストが戸惑いや動揺といった違和感を感じたかどうか、という点が挙げられる。リズムカルな言葉のやりとりにおいて初めて、セラピストはクライアントの遊びに伴う強引にも感じられる猛烈な勢いに気づかされ、戸惑いや動揺といった主体的な感情を感じることができるようになった。湊 (2007) は、面接の中でクライアントと治療者双方が心的麻痺状態にある中で発せられた治療者の偶発的な発言が、クライアントと治療者の双方が主体的に考える契機として作用した事例を報告しているが、この知見を参考にすると、本エピソードは、クラ

クライアントの発したリズムカルなやりとりを構成する言葉がセラピストに知覚されることによって、セラピストは、それまでの遊びにおける、動作に伴うリズムを媒体としてクライアントから伝えられていた心的エネルギーの勢いや強度や、それにのみこまれるように自身が応じていたことに気づかされ、戸惑いや驚きといったセラピスト自身の感情をとり戻し、主体的に反応することができるようになったと考えることができよう。こうしたセラピストの言葉による感情の表明は、クライアントに対して、セラピストは自分と同じ考えや思いを抱いているのではないという認識をもたせた可能性がある。すなわち、クライアントはリズムカルなやりとりの中で双方の主観的感情状態が異なることを認知し、セラピストとクライアントがそれぞれ個別の存在であることを認識するにいたったということが示唆されるのである。

これまでに言葉の意味内容の次元とリズムの次元に分けて考察してきたが、両者を総合すると、以下のようにいうことができる。クライアントは、セラピストとの原初的接近を希求する強い心的エネルギーの高まりを体験していた可能性があり、そうしたエネルギーがやりとりに伴うリズムを媒体としてセラピストに伝えられた。リズムを介した情動の次元において、クライアントとセラピストは呼応し、原初的母子関係にみられる共鳴・合体状態にあった。こうした深い結びつきと同時に、クライアントの言葉に付随したリズムの強度によって、セラピストはそれまでの遊びでは感じていなかった違和感といった主体的な感情を感じるようになり、それを表明するにいたった。このセラピストの表明が、クライアントに個の存在として自分とセラピストが共にあることを気づかせる契機として働いた可能性があった。つまり、クライアントとセラピストの原初的な共鳴・合体状態と、それぞれが個別の存在として区分された状態が、このリズムカルなやりとりにおいて、同時に、多層的に生じていたと考えられる。そして、このやりとりがリズムによって維持され、調律が繰り返されることを通じて、クライアントは、セラピストと自分は個別の存在でありながらも、共鳴状態のような結びつきをもつことができるということを経験していったのではないだろうか。このために、言葉の意味内容の次元から考察した、「だんごむし嫌い？」に続く一連の誕生のイメージの展開、およびX + 1回以降にリズムカルなやりとりや、セラピストとの合体を希求するような遊びがみられなくなったと考えることも可能であろう。

VI 総合考察と今後の課題

本論では、心理臨床場面でリズムが生起するとき、そこで何が生じているのか考察することを目的とした。先行研究から、生命の根源ともつながりうるリズムを人は全身で経験すること、リズムは心的エネルギーの上昇や放出に伴って生起し、興奮と沈静や安心感が交じり合った快を体験することが示唆された。また、リズムを媒体としたやりとりは、人に原初的な共鳴体験をもたらし、こうした情緒レベルでの結びつきは、心理臨床の実践を理解する上で、非常に有用であることが多くの臨床家によって指摘されてきた。これら知見をもとに、事例エピソードを考察した。言葉の意味内容の側面から検討すると治療的な過程を見出すことの難しかった一連のやりとりが、そのやりとりのリズムカルな側面から検討することで事例エピソードの展開に関わる仮説をたてることが可能になった。リズムは、クライアントとセラピストの内的な非

常に強い力動的変化を伝える媒体として機能した。すなわち、このやりとりは、リズムを介した調律による情緒の合体状態に支えられる中で、クライアントとセラピストが別々の個として存在するという多層的な体験をもたらし、面接過程に変化がもたらされた可能性が考えられた。

最後に今後の課題を述べると、今回は考察が一つの事例のエピソードに限定されていたことが本稿の限界をつくっているといえる。今後新たな事例エピソードの考察を蓄積することにより、リズムと心理臨床の関わりに関してより多くの知見を得られるであろう。

《謝 辞》

本論文は、京都大学大学院教育学研究科の皆藤章教授、角野善宏教授、大山泰宏准教授からの含蓄あるご指摘と、暖かく力強い励ましのお言葉に力づけられ、書き上げることができました。また、本稿作成にあたり、終始支え続けて下さった家族や友人をはじめとする多くの方々、そしてエピソードの記載を快諾くださったクライアント、皆様に心より感謝申し上げます。

《文 献》

- Freud, S. (1923): Das Ich und das Es. 中山元(訳) (1996): 自我とエス. 竹田青嗣(編) 中山元(訳). 自我論集. 筑摩書房. pp201-273
- 後藤靖宏(2000): 3章 リズム(旋律の時間的側面). 谷口高士(編著). 音は心の中で音楽になる 音楽心理学への招待. 北大路書房. pp53-79
- Greenacre, P., Kris, E. Freud, A., Hartmann, H., Lewin, B.D., Escalona, S., Loewenstein, R.M., Jacobson, E., Spitz, R.A., Waelder, R., Davison, C., Bell, A., Mittelman, B., Mahler, M.S., Bychowski, G. (1954). Problems of Infantile Neurosis-A Discussion.. *Psychoanalytic. Study of the Child*. 9. pp 16-71.
- 伊藤良子(1984): 自閉症児の〈見ること〉の意味 身体イメージ獲得による象徴形成に向けて. *心理臨床学研究*. 1(2). pp44-56
- Jaques-Dalcroze, É. (1965): Le rythme, la musique et l'éducation. 板野平(監)・山本昌男(訳). (2003): リトミック論文集 リズムと音楽と教育. 全音楽譜出版社
- 神田橋條治(1990): 精神療法面接のコツ. 岩崎学術出版社
- 河合隼雄(1991): イメージの心理学. 青土社
- 小泉博一(2001): 座談会／表現とは何か. 小泉博一・吉田直子(編). 現代のエスプリ 表現と癒し. 至文堂
- Kris, E. (1940): Laughter as an Expressive Process Contributions to the Psycho-Analysis of Expressive Behaviour. *International Journal of Psycho-Analysis*. 21. pp314-341
- La Barre, F. (2005): The Kinetic Transference and Countertransference. *Contemporary. Psychoanalysis*, 41. p p 249-279.
- 松木邦裕(2010): 分析実践の進展 精神分析臨床論考集. 創元社
- 湊真季子(2007): 心理療法における予測不能性. *精神分析研究*. 51(1). pp1-11
- 中村雄二郎・勅使河原三郎(1999): X ダンスという領域. 中村雄二郎(編): 対話的思考—好奇心・ドラマ・リズム. 新曜社
- 西巻靖和(2004): 第6章 重度心身障害児への音楽療法. 飯森真喜雄・阪上正巳(編): 芸術療法実践講座4 音楽療法. 岩崎学術出版社 pp97-114
- Stern, D.N. (1985): The Interpersonal World of the Infant: A View from Psychoanalysis and Developmental Psychology: 小此木啓吾・丸田俊彦(監訳) 神庭靖子・神庭重信(訳) (1989): 乳児の対人世界 理論編. 岩崎学術出版社
- Sullivan, H.S. (1954): The Psychiatric Interview. 中井久夫・宮崎隆吉・高木敬三・鏑幹八郎(共訳) (1986): 精神医学的面接. みすず書房

中野：心理臨床の場におけるリズムの生起に関する試論

徳丸吉彦(2007):10 リズムと時間構造. 笠原潔・徳丸吉彦(著):音楽理論の基礎. 放送大学教育振興会.
pp135-146

Trevarthen,C.,Robarts, J., Papoudi, D., Aitken, K.(1998):Children with Autism 2nd edition Diagnosis
and Interventions to Meet Their Needs. 中野茂・伊藤良子・近藤清美(監訳)(2005):自閉症の子ども
たち 問主観性の発達心理学からのアプローチ. ミネルヴァ書房

(臨床心理実践学講座 博士後期課程 2 回生)

(受稿2010年9月6日、改稿2010年11月26日、受理2010年12月9日)

A Study of Rhythm Occurring in Play Therapy: Analyzing Rhythmical Communication Between Client and Therapist

NAKANO Eriko

The present study aims to examine what happened in play therapy in which the therapist was given a strong impression by the rhythmical communication between client and therapist. Rhythm is linked to psycho-soma and experienced through the whole body. When people utter words and phrases rhythmically, the words and the phrases are put together in both rhythmical order and prosaic order at the same time. As a result, words and phrases in the rhythmical conversation attain new and unique meanings. Rhythmical communication in therapy can achieve effective attunement between the client and the therapist, which gives them an interpersonal communion (D.N. Stern, 1985). When they say words or phrases in a rhythmical way, each rhythm with their words or phrases affects the other and creates a new and powerful rhythm. By analyzing the play therapy process and the rhythmical communication in the therapy, it is implied that the communication, and the power of its rhythm, help the client and the therapist to continue together in therapy, overcoming the conversational problem that causes them to feel that the meanings of their words' and phrases' are unbearable. Thus, rhythm can play an important role in a critical phase of the therapy.